新月会60周年記念演奏会 【1994年（平成6年）6月19日】 ザ・シンフォニーホール

ハーモニーに抱かれて奏でる多田武彦の心髄

●男声合唱組曲「中勘助の詩から」　指揮 亀井 清一郎
　絵日傘　（独唱 今井 博）
　椿
　四十雀
　ほほじろの声
　かもめ　（独唱 今井 博）
　ふり売り　（呼び声 山下 弘）
　追羽根　（独唱 土井 賢志）
●男声合唱組曲「雪明りの路」より　指揮 多田 武彦
　月夜を歩く

「月夜を歩く」（雪明りの路）

２年前、グリークラブリサイタルのプログラムに多田先生は次のように書いておられました。

「16・7才の頃、私も月夜を歩くのが無性に好きだった。昭和20年に戦争が終わって、その年の１１月に大阪の東住吉に住み変えたが、翌年の春頃から、月の明るい夜、夕食後大和川の方へ向かって歩き出す。季節によって霞がかかったり、蛙の合唱があったり、誘蛾灯が青白く光ったり、河内音頭が秋の夜風に流されて来たり、さまざまな光景が広がった。　昭和35年、関学グリーから二度目の作品を委嘱されたとき、『伊藤整先生が幼少の頃過ごされた小樽のさまざまな姿』を描いてみようと『雪明りの路』に取り組んだが、最初に『月夜を歩く』が目に止まった。・・・

この組曲を歌った人たちの何人かは、小樽へ旅行し、月夜にこの『いたどりの多い坂道』を歩いている。地球上の数え切れない人たちが、長い年月の間、月夜を歩いたとすれば、この行為は、どうも人間工学の原点に近いところに位置するらしい。だからひとりでに拍手が湧きおこるのであろう。・・・・・」

多田先生自らの指揮による演奏で、この素朴な詩に浸っていただきたいと思います。

組曲「中勘助の詩から」の想い出

多田　武彦

この関学グリーへの初めての組曲を作るについては、かなりの緊張があった。その前年、私の二番目の弟が同志社グリーに居た御縁で組曲「雪と花火」を作った処、名初演がおこなわれた。「合唱界の二横綱の一人の名演」の翌年、今度は私の三番目の弟が関学グリーに居た御縁で、組曲を作ることになった。

此処で愚作を作ったら申し訳ないし、二番煎じのような作品では顰蹙（ひんしゅく）を買う。学生時代怖かった林雄一郎先生の顔もちらついた。

前作の白秋とはずっと趣を変えて、「詩作数も少なく然程著名ではないが、きらりと光る詩人の魂」に感動させられていた中勘助の詩を選ぶことにした。制作過程で、私は詩人中勘助先生に会いに行ったが、矍鑠（かくしゃく）とした老大家の優しい眼差しは、生涯忘れられない。　こうして、この組曲は、髄所に新味を盛り込んで完成し、初演は故・根津弘氏の指揮で、その年の四連では上木義和氏の指揮で、関学グリーが素晴らしい中勘助の世界を繰り広げてくれた。関学グリーから贈られたテープをダビングして中先生にお送りしたところ、無伴奏男声合唱を初めて聴かれた先生は、このモノトーンの美しさと関学グリーの名演奏に大変感動された。そして特に「追羽根」を、感慨深く聴かれたそうだ。

♭　　♭　　♭

本日は、私のような浅学非才の老人をお招きくださり、口上の場なども組んでいただき、誠にありがとうございました。

昭和24年に関学グリーの50周年記念演奏会を聴かなかったら、私は合唱とは生涯無縁でしたでしょうし、「柳河」も「中勘」も「雪明り」も生まれていなかったでしょう。

「合唱音楽という素晴らしい人生の贈り物」を与えて下さった関西学院グリークラブに、心から厚く御礼申し上げます。